

論文

立命館アジア太平洋大学 国際教育寮 APハウス^{注1)}におけるリビング・ラーニングコミュニティ^{注2)}の構築

大澤 芳樹 (立命館アジア太平洋大学
アカデミック・オフィス)
近森 節子 (大学行政研究・研修
センター専任研究員)
木田 成也 (立命館アジア太平
洋大学事務局次長)
阿部 泰治 (立命館アジア太平洋大学
アカデミック・オフィス課長)

I. 研究の背景

1. 日本における先駆的国際大学立命館アジア太平洋大学
2. 国内学生を取り巻く状況
3. 国際学生を取り巻く状況
4. 移行支援策としての寮を基盤としたラーニングコミュニティ

II. 研究の目的

III. 研究の方法

1. 海外大学調査
2. 学生へのアンケート調査
3. 教員へのアンケート調査

IV. 海外大学調査

1. ワシントン大学 (Washington University) の取組み状況についての訪問調査
2. 2008 Living Learning Programs Conference における調査
3. 海外大学調査からの示唆

V. 学生アンケート調査にみる学生実態

1. アンケートの概容
2. アンケート結果の分析

VI. 学生実態調査のまとめ

1. 入学時の高い意欲を維持・向上させるための支援

2. キャリア・アドバイジング (将来に対する目標設定の支援)

3. 反対言語能力の強化

4. スタディスキルとチューデントスキルの修得

5. 担当教員制による小規模集団でのきめ細かな指導

VII. 教員アンケート調査にみる意識実態

1. 教員アンケートの概要

2. アンケート結果の分析

VIII. 教員対象アンケート調査のまとめ

1. 入学時の学習意欲は高いが学力は不十分

2. 50%以上の教員が初年次教育科目に関心がある

IX. 政策提起にあたって

X. 政策提起

1. 正規科目 (WSI) とリビング・ラーニングコミュニティの有機的な融合

2. APハウス リビング・ラーニングコミュニティの編成

XI. 研究のまとめ

XII. 残された課題

I. 研究の背景

1. 日本における先駆的国際大学立命館アジア太平洋大学

2000年4月、立命館アジア太平洋大学（以下、APUという）は、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相

互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念とし、アジア太平洋の未来創造に貢献する有為の人材の養成と新たな学問の創造のために大分県別府市に開学した。APUでは2008年5月1日現在、アジア太平洋学部およびアジアマネジメント学部において、世界81の国と地域から集まった国際学生2,384名（短期留学生を含む）

と国内学生3,204名が同じキャンパスで学んでおり、日本国内では類のない多文化キャンパスである。

開学以来、日本国内における先駆的国際大学として注目を集めてきたAPUであるが、日本の高等教育を取り巻く情勢の変化や「留学生30万人計画」^{注3)}の実施に伴い、国内・国際学生がAPUという多文化環境を十分に活用し、大学での“成功”を獲得する上で、APUとして取り組むべき課題が顕著となってきた。

2. 国内学生を取り巻く状況

日本の18歳人口は、1992年度の約205万人をピークに減少の一途を辿っており、2007年度には約130万人となった。18歳人口の減少に伴い、2007年度に4年生大学・短期大学へ進学した18歳人口の割合は51.2%となった。今後10年間の18歳人口は、110万人から120万人台で推移することが予想され、高等教育への進学を希望するものの大部分が進学することができるいわゆる“大学全入時代”は今後一層進行することが予想される。

このような“高等教育の大衆化”が進行する中、高等教育機関に入学してくる学生の学力低下や高等教育機関における学びに対する目的意識の希薄化などが、近年特に問題視されている。

2007年度にAPUにおいて実施した学生調査アンケートでも、「学生生活に満足しているか」という質問に対して「満足していない」もしくは「非常に不満である」と回答した学生の多くが、大学生活への不適合、学力低下、目的意識の希薄化が原因と思われる理由を挙げており（図1）、APUにおいても“高等教育の大衆化”に伴う学生の学力低下や目的意識の希薄化は顕著となっている。

このように様々な学力、学習動機や学習習慣などを持った国内学生を受け入れ、アジア太平洋の未来創造に貢

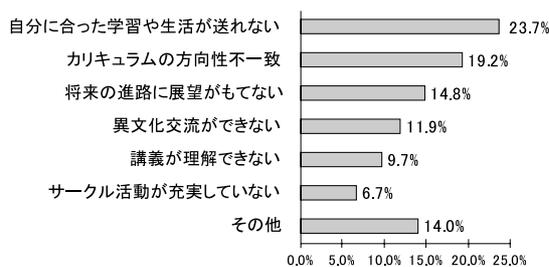


図1 APU生が大学生活に満足していない理由
(n = 219)

献する真の国際人へと育成していくためには、学生の大学生活に対する意欲や学力の向上を目的とした高校から大学への移行支援について、大学として取り組んでいくことが強く求められる。

3. 国際学生を取り巻く状況

APUに入学してくる国際学生の多くは、海外に出て初めての大学生活を送ることとなるため、入学直後の段階から国際学生の日本での大学生活への移行支援を行っていくことは極めて重要である。APUに入学してくる国際学生の大部分は国際教育寮APハウスに入寮し、レジデント・アシスタント（以下、RAという）と呼ばれる学生が国際学生の生活面における支援を行っている。このRA組織に関しては、中村（2005）の研究をもとにしたRA養成プログラムが実現しており、担当教員の指導のもと、国際学生の生活支援を行う上で必要となる様々な訓練を受けた学生が、昼夜を問わず国際学生の支援を行っている。

しかしながら、RAによる国際学生の支援は、国際学生の“日本での生活への適応支援”が中心となっており、学生による学生に対する支援ということもあり、学習面を含めた“大学生活への移行支援”については未だ不十分である。国際学生が異国の地において充実した大学生活を送る上で、“日本での生活への適応支援”だけでなく、“日本での大学生への移行支援”についても大学として積極的に取り組んで行くことが求められている。

4. 移行支援策としての寮を基盤としたラーニングコミュニティ

APU国内・国際学生を取り巻く現状を踏まえると、初年次生にとって高校から大学生活への移行は学習面と生活面の両面において極めて大きな変化であり、この両面について初年次生を支援していくことが必要である。

学習面と生活面の両面における初年次生への支援を行っていく上で、有効であると考えられる取り組みにラーニングコミュニティの構築が挙げられる。ラーニングコミュニティとは、学生をより小さなコミュニティに編成し、学生相互、学生と教員、そして学生と彼らが学ぶテーマとの結びつきを強め、豊かにすることによって、初年次生の大学での学業生活と社会生活への移行を促進することを目的とした取り組みである。例えば、ペア科目ラーニングコミュニティと呼ばれる取り組みでは、初年

次生が2つの科目を20名から30名の同じ小規模集団で履修する。このような環境において、初年次生同士が多く時間を共有することによって、学習面において互いに助け合う関係が生まれ、初年次生の学習面での成功が高まる。さらにラーニングコミュニティにおける関係構築を通して、初年次生に共同体としての意識が生まれ、社会性が高まり、生活面における成功も高まることが期待される。また、ラーニングコミュニティは小規模集団であるため、教員との関係構築も進み、初年次生への学習面における細やかな支援も可能となる。

ラーニングコミュニティには様々な形態が存在するが、特にその有効性が注目されているのが寮を基盤としたラーニングコミュニティであるリビング・ラーニングコミュニティである。リビング・ラーニングコミュニティでは、初年次生は教室内において同じ小規模集団で学習を進めるだけでなく、寮に帰ってからも同じ集団で生活する。寮という生活の場でも同じ集団で時間を共有することから、初年次生の間には親しい人間関係が生まれ、集団の中に安定した居場所を獲得することが可能となり、初年次生同士の関係構築がさらに進む。このような安定した人間関係は、学習面でのプラスの効果をもたらし、学習面と生活面における初年次生の高校から大学への移行が円滑に進むことが期待できる。

APUには、国際新入生のほぼ全員(約900名)と国内新入生の約40%(約280名)が入寮する国際教育寮 APハウスが存在する。このAPハウスという資源を活用し、初年次生の学習面と生活面の両面における大学生活への円滑な移行支援策としてリビング・ラーニングコミュニティの構築に取り組んで行くことは、日本における先進的な国際大学として位置付けられているAPUが、新たな教育モデルを構築するという点で大きな意味のあることといえる。

II. 研究の目的

本研究の目的は、APUという特徴的な国際大学において、国内・国際学生のそれぞれが大学での“成功”を獲得する上で極めて重要な初年次段階における生活面と学習面における支援内容や学生実態を明らかにし、米国におけるリビング・ラーニングコミュニティをモデルとしつつ、国際教育寮 APハウスにおけるリビング・ラーニングコミュニティを構築することである。

III. 研究の方法

1. 海外大学調査

米国におけるリビング・ラーニングコミュニティに関する実態調査を行う。

対象はワシントン大学並びに2008 Living Learning Programs Conference^{注4)}に参加したルイジアナ州立大学とノースカロライナ州立大学とする。

2. 学生へのアンケート調査

APU学生の大学生活に対する意欲、学力、大学生活への円滑な移行を行う上で必要としている支援内容などの把握を目的としたアンケート調査を実施する。

3. 教員へのアンケート調査

教員の視点から、APU学生の大学生活、学力をどのように捉えているか、また初年次教育に対する認識状況把握を目的としたアンケート調査を実施する。

IV. 海外大学調査

1. ワシントン大学 (Washington University) の取り組み状況についての訪問調査

ワシントン大学の基本的な通常のラーニングコミュニティは、Freshman Interest Groups(以下、FIG)と呼ばれ、20名程度が一般教養2科目とGeneral Studies199を同じグループで入学直後の1クォーターの間受講する。寮を基盤としたResidential Freshman Interest Groups (RFIG)では1年間にわたり同グループに属する学生が寮生活と学習を共にし、教員による講義が寮内の教室において行われている。一般教養科目は、教員による講義と大学院TAによるワークショップから成り立っており、ワークショップではディスカッションなどが中心となっている。General Studies 199では、大学において利用可能なリソースの紹介、教員との関わり方、学習計画の立て方など、大学生として必要となる情報やスキルなどの修得を目的としている。

2. 2008 Living Learning Programs Conference における調査

(1) ルイジアナ州立大学の取り組み

ルイジアナ州立大学では生命科学分野を専攻する初年

次生を対象としたBIOSphereと呼ばれるリビング・ラーニングコミュニティが存在する。BIOSphereでは、30名程度の学生が入学最初のセメスターにおいて1～2科目の基礎生物学科目とLSU1001と呼ばれる初年次生を対象とした演習科目を同じBIOSphereに所属する学生同士が履修する。

LSU1001では、専門職員の指導のもと、主にノートテークングスキル、リーディングスキル、ライティングスキル、タイムマネジメントの仕方など、大学生として学習する上で必要となるスキルを中心に学習する。BIOSphereに登録するためには、入学前オリエンテーションであるBIOS^{注5)}に参加していることが必須条件であるため、BIOSphereに登録する学生の多くは、互いに入学前からの顔見知りであり、BIOSphereにおける活発な交流や議論の基盤となっている。

（2）ノースカロライナ州立大学の取り組み

ノースカロライナ州立大学の初年次生の多くは、アカデミックアドバイザーが担当するUSC101と教員が担当するFirst Year Inquiry(FYI)を履修する。USC101では、アカデミックおよびキャリア・プランニング、効率的な学習方法、大学で活用すべきリソースや遵守すべきルールなどに関する講義やグループワークが中心となっている。また、アカデミックアドバイザーには授業以外に自分が担当する初年次生とセメスター中に最低でも2回のミーティングを持つことが義務付けられている。

FYIは、初年次生の学問に対する探求心を養成するために、初年次生の批判的思考力、読解力、文章力、討論力、問題解決力の向上に重点を置いた科目であり、20名程度で履修する。First Year College Village（以下、FYCVという）と呼ばれる寮に入寮する新入生については、同じユニットで暮らす寮生とともにUSC101とFYIを履修する。

3. 海外大学調査からの示唆

（1）リビング・ラーニングコミュニティの形態

調査した全ての大学において初年次生は、小規模集団で同一科目を受講し、一緒に寮生活を行っている。初年次生にとっては、寮に戻っても学習面で協力し、学習内容について議論を行うことなどができるため、学習に取り組みやすい環境となっており、学習に対する意欲も高まると考えられる。また、教室内外において同じグルー

プの初年次生と多くの時間を共有し、初年次生同士の関係構築が進み、共同体としての意識が醸成されていると考えられる。さらに、ルイジアナ州立大学のように、入学前から初年次生同士の関係構築を行っておくことも、リビング・ラーニングコミュニティの効果を挙げるための有効な手段であると考えられる。

ルイジアナ州立大学とノースカロライナ州立大学については、それぞれの取組みについて、リビング・ラーニングコミュニティ所属学生のGPAや修得単位に関する検証を行っており、それらの結果は初年次生の大学生活への移行支援策としてのリビング・ラーニングコミュニティの有効性を示している^{注6)}。

（2）履修する科目の特徴

初年次生が履修する科目は一般教養科目が中心であり、教員が小規模集団で担当するため、大学への導入教育として有効であり、教員による細やかな支援や関係構築が可能であると考えられる。また、初年次生は通常科目に加え、スチューデントスキル^{注7)}であるタイムマネジメント、スタディスキルである大学での学習方法、必要な学習スキル、大学のリソースなど大学生として学習する上で必要となる知識やスキルの修得を目的とした科目についても履修している。特にタイムマネジメントについては全ての大学で実施しており、初年次生が修得すべき最も重要なスキルの一つであると考えられる。

V. 学生アンケート調査にみる学生実態

1. アンケートの概要

- ①アンケート名：「一回生の大学生活に関する学生アンケート」
- ②実施目的：APU学生の大学生活に対する意欲、学力、大学生活への円滑な移行を行う上で必要としている支援内容などの把握
- ③実施日時：2008年7月24日（木）3限目
- ④対象人数：学部生3,337名
- ⑤回収数（回収率）：1679枚（50.3%）

2. アンケート結果の分析

（1）大学生活に対する意欲について

- ①入学時の大学生活に対する意欲
入学時の大学生活に対する意欲に関する質問に対

して、「非常に高かった」「比較的高かった」と回答した学生は国内学生74.7%、国際学生72.7% (図2)となっており、国内・国際学生ともに入学時の大学生活に対する意欲は高い傾向にある。しかしながら、国内学生については、「比較的lowかった」もしくは「非常にlowかった」と回答したものは8.4%となっており、国際学生の3.7%と比較すると高い比率となっている。

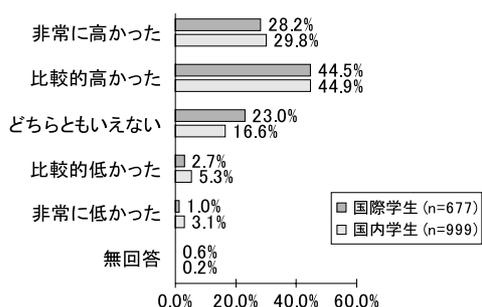


図2 入学時の大学生活に対する意欲

②入学後の大学生活に対する意欲の変化

表1は、入学後の大学生活に対する意欲の変化に関する質問への回答結果を集計したものである。その結果、大学生活に対する意欲が高い層（「非常に高かった」、「比較的高かった」）を中心に、国内学生については全体の40.5%、国際学生については全体の38.2%が、入学後に意欲が「低くなった」もしくは「やや低くなった」と回答している。

さらに、大学生活に意欲が高い学生について意欲が変化した時期を知るために、高くなった=5、やや高くなった=4、変化しなかった=3、やや低くなった=2、低くなった=1として数値化し、一回生と二回生以上の意欲の変化を比較したところ (表2)、国内・国際学生ともに一回生と二回生以上で

表2 意欲が変化する時期

| | 全体 | 一回生 | 二回生以上 |
|------|------|-------|-------|
| 国内学生 | 2.90 | 3.11* | 2.78 |
| 国際学生 | 2.90 | 3.12* | 2.79 |

有意差が認められた(p<.01)。

二回生以上については、どの段階で意欲が低下するかについて、時期を判断することは困難であるが、意欲が高い国内・国際学生ともに、二回生以降に意欲の低下が生まれることが読み取れる。

③意欲が低下する理由について

意欲が低下する理由としては、図3に見る通り、国内・国際学生ともに「カリキュラム上の問題」が理由として最も高い比率 (国内20.7%、国際28.6%)を占めている。意欲が高い学生が二回生移行時に意欲が低下するという分析結果を踏まえ、入学時に意欲が高く、入学後に低くなったと回答した二回生以上の意欲低下の理由について分析したところ、同様に「カリキュラム上の問題」が最も高い比率であった。さらに入学時の意欲が高く、入学後に意欲が低

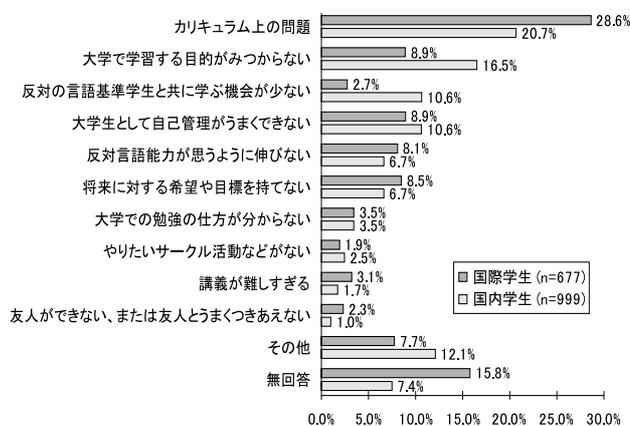


図3 大学生活に対する意欲が低下する理由

表1 入学時の大学生活に対する意欲と入学時の変化 (国内・国際学生別)

| 入学後の意欲の変化 | 高くなった | | やや高くなった | | 変化しなかった | | やや低くなった | | 低くなった | | 総計 |
|-----------|-------|-------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|-------|-------|--------|
| | 国内 | 国際 | 国内 | 国際 | 国内 | 国際 | 国内 | 国際 | 国内 | 国際 | |
| 入学時の意欲 | | | | | | | | | | | |
| 非常に高かった | 6.4% | 5.3% | 3.1% | 4.7% | 4.7% | 5.8% | 10.8% | 8.0% | 4.6% | 4.4% | 29.8% |
| 比較的高かった | 3.6% | 3.5% | 11.4% | 10.2% | 11.1% | 11.8% | 15.4% | 14.9% | 3.4% | 4.0% | 44.9% |
| どちらともいえない | 1.5% | 3.1% | 5.6% | 8.7% | 5.1% | 5.5% | 3.2% | 4.1% | 1.2% | 1.6% | 16.6% |
| 比較的lowかった | 0.4% | 0.1% | 2.5% | 0.1% | 1.6% | 0.4% | 0.5% | 0.0% | 0.3% | 0.3% | 5.3% |
| 非常にlowかった | 0.9% | 0.1% | 0.9% | 0.9% | 0.2% | 0.7% | 0.1% | 0.6% | 1.0% | 0.3% | 3.1% |
| 総計 | 12.8% | 12.6% | 23.7% | 24.8% | 22.7% | 24.2% | 30.0% | 27.6% | 10.5% | 10.6% | 100.0% |

表3 「カリキュラム上の問題」と回答した初年次生と二回生以上の比較

| 意欲が下がる理由 | 国内学生 | | 国際学生 | |
|------------|-------|-------|-------|-------|
| | 初年次生 | 二回生以上 | 初年次生 | 二回生以上 |
| カリキュラム上の問題 | 16.9% | 22.6% | 21.1% | 34.2% |

下した学生を初年次生と二回生以上に分け、意欲が低下する理由として「カリキュラム上の問題」を挙げている学生の比率を比較したところ、国際学生についてのみ有意差 ($p<.05$) が認められた(表3)。

「カリキュラム上の問題」以外には「大学生として自己管理がうまくできない(国内学生10.6%、国際学生8.9%)」「反対言語^{注8)}能力が思うように伸びない(国内学生6.7%、国際学生8.1%)」、「将来に対する希望や目標が持てない(国内学生6.7%、国際学生8.5%)」が国内・国際学生に共通して見受けられるが、特に国内学生については、「大学で学習する目的が見つからない」、「反対の言語基準学生と共に学ぶ機会が少ない」が国際学生と比較して高くなっている。

(2) 入学時の学力について

入学時の学力については、国際学生の57.7%が「十分である」、「まずは十分である」と回答している一方、国内学生については27.2%に留まっている。また、「やや不十分である」、「不十分である」と回答した比率は国内学生48.9%、国際学生12.7%となっている(図4)。

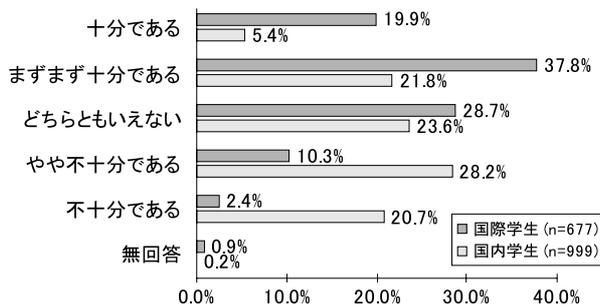


図4 入学時の学力

入学時に不足していると感じている学力については、図5に見る通り、「反対言語のコミュニケーション力(国内学生17.0%、国際学生13.4%)」、「反対言語の読解力(国内学生12.8%、国際学生8.5%)」、「反対言語の文章作成能力(国内学生11.4%、国際学生9.2%)」となっており、国内・国際学生ともに反対言語に関する能力に

ついて不足していると感じている。また、国際学生の入学基準言語に関する項目、「コミュニケーション力(国内学生2.9%、国際学生9.3%)」、「読解力(国内学生3.0%、国際学生6.7%)」、「文章作成能力(国内学生4.1%、国際学生8.8%)」が国内学生と比較して明らかに高い比率となっている。その他には「プレゼンテーション能力(国内学生9.2%、国際学生8.5%)」、「レポートの書き方(国内学生7.7%、国際学生9.6%)」についても国内・国際学生ともに比較的高くなっている。国内学生についてはこれらに加え「論理的思考力(9.8%)」、「パソコンに関する知識(7.8%)」が国際学生と比較して高い比率を占めている。

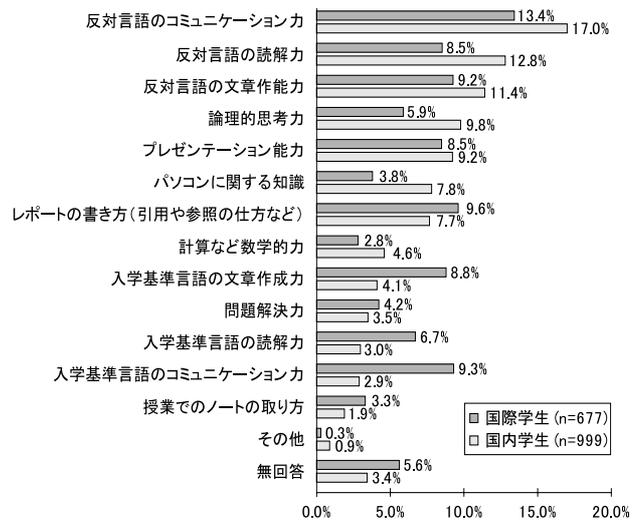


図5 具体的に不足していると感じる力

(3) 初年次生が苦勞する点(学習面・生活面)と相談相手

学習面において初年次生が最も苦勞した点では、「履修登録方法や科目の選び方(国内23.4%、国際17.1%)」、「大学での勉強の仕方(国内22.1%、国際15.8%)」、「言語の講義が難しい(国内18.2%、国際15.5%)」、「学習に対する意欲が湧かない(国内16.8%、国際19.2%)」が国内・国際学生ともに高い比率となっている(図6)。さらに、国際学生については、「学習面における相談相手がいない」と回答した学生が12.7%とな

っている。

生活面で最も苦勞した点(図7)については、「サークルやアルバイトと勉強のバランス(国内33.6%、国際32.8%)」、「反対言語の学生との交流(国内21.0%、国際19.8%)」、「大学生としての自己管理(授業への出席など)(国内18.7%、国際10.0%)」や「(学習面以外で)大学生活に対する意欲が湧かない(国内9.1%、国際14.0%)」が高い比率となっている。また、「生活面の相談相手がいない」と回答した学生は国内学生1.7%、国際学生6.9%となり、学習面同様に国際学生の孤立感が読み取れる。

表4は初年次生の学習面および生活面における相談相手についての回答を集計したものである。

国内学生の場合、学習面の相談相手については大学の同級生(51.3%)と先輩(20.2%)の比率が高くなり、生活面については同級生(46.3%)と家族(21.4%)の比率が高くなっている。国際学生についても学習面の相談相手は同級生(39.1%)と先輩(27.2%)に加え、家族(17.0%)の割合が高くなり、生活面については家族(32.8%)、大学の同級生(27.2%)、先輩(16.2%)の比率が高くなっている。一方、教員(ゼミ・ゼミ以外の合計)については、生活面(国内0%、国際4.2%)だけでなく学習面(国内3.5%、国際4.7%)においても低い比率となっている。

また、「一回生のときに、学習面で相談できる教員を

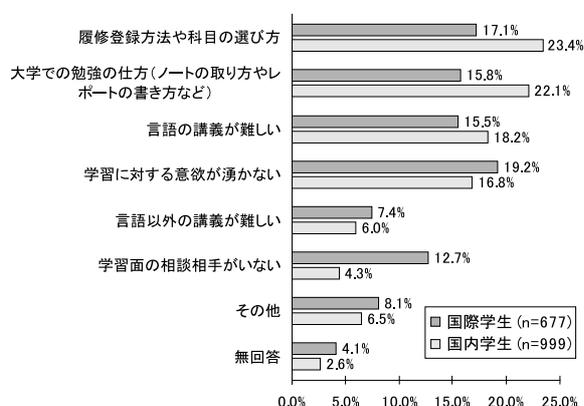


図6 初年次に学習面で最も苦勞した点

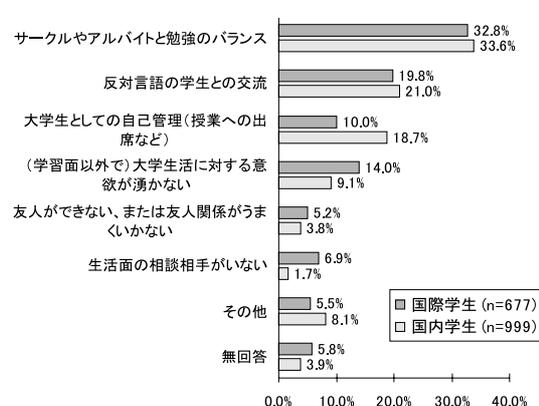


図7 初年次に生活面で最も苦勞した点

表4 初年次生の相談相手(学習面・生活面)

| 相談相手 | 国内学生 | | 国際学生 | |
|------------------|-------|-------|-------|-------|
| | 学習面 | 生活面 | 学習面 | 生活面 |
| 大学の同級生 | 51.3% | 46.3% | 39.1% | 27.2% |
| 大学の先輩 | 20.2% | 13.8% | 27.2% | 16.2% |
| 大学以外の友人や先輩 | 9.4% | 13.5% | 5.1% | 9.4% |
| 家族 | 8.5% | 21.4% | 17.0% | 32.8% |
| 大学教員(ゼミ以外) | 3.2% | 0% | 4.3% | 2.1% |
| ゼミの担当教員 | 0.3% | 0% | 0.4% | 2.1% |
| 大学以外の教員(高校の先生など) | 0% | 0% | 0% | 0.4% |
| その他 | 4.1% | 2.6% | 2.6% | 3.4% |

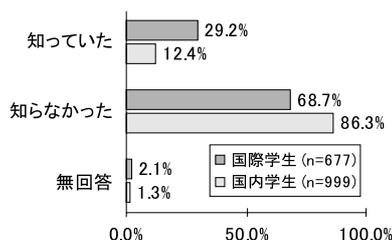


図8 初年次生が学習面で相談できる教員を知っていた割合

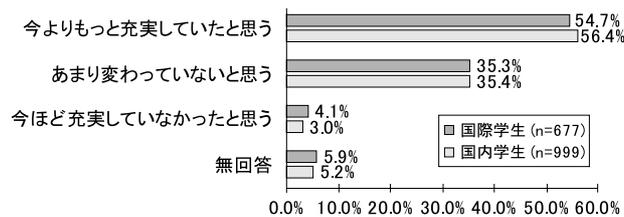


図9 初年次段階でゼミ形式の授業があった場合の現在の大学生活に対する感想

知っていたか」という質問に対しても、「知っている」と回答した学生は国内学生12.4%、国際学生29.2%となっており、初年次生の大部分が教員と学習面で相談を行えるような関係が構築できていないことが伺える（図8）。

「初年次段階でゼミ形式の授業があった場合、現在の大学生活はどうなっていたと思うか」という質問に対しては、「今よりもっと充実していたと思う（国内56.4%、国際54.7%）」という回答が最も多かった（図9）。

VI. 学生実態調査のまとめ

学生実態調査から得られた結果により、APU学生が大学における成功を修める上で、以下の5点について初年次段階から支援して行く必要があると考えられる。

1. 入学時の高い意欲を維持・向上させるための支援

(1) アカデミック・アドバイザー（国際学生）

国際学生は、2回生以降に「カリキュラム上の問題」を理由として、大学生活に対する意欲を低下させる傾向にある。「大学で学習する目的が見つからない」を意欲低下の理由として挙げている国際学生の比率が国内学生と比較して低くなっているという点は、国際学生の多くは大学で学習する目的は持っているが、2回生以降にカリキュラム上の問題に直面することによって大学生活に対する意欲を低下させていることを示している。

APUのカリキュラムでは、初年次生は主に言語科目や新入生ワークショップ（以下、新入生WSという）I・II^{注9)}を中心に履修し、2回生以降に各自で履修計画を立て、履修すべき科目の選択を行っていく。しかしながら、学生の学習面に関する相談相手の大部分が同級生、先輩や家族であるという点や、初年次の段階で学習面について相談できる教員を多くの国際学生が知らなかったと回答している点を踏まえると、初年次生は2回生以降に系統的な履修を行っていくための情報や知識が不足しており、2回生以降にカリキュラム上の問題に直面している可能性が高いと考えられる。「カリキュラム上の問題」についてはこの他にも様々な要因が存在することが想定されるが、国際学生が2回生以降に系統的な学習を行っていくための支援について取り組んで行くことが重要であると考えられる。

(2) 反対言語基準の学生との学び（国内学生）

国内学生についても、「カリキュラム上の問題」が大学生活に対する意欲が低下する理由として最も多くなっているが、国際学生ほど「カリキュラム上の問題」を原因として2回生以降に意欲が低下する傾向は示されていない。しかしながら、国内学生については、「反対の言語基準学生と共に学ぶ機会が少ない」といった理由を挙げている学生の比率が高くなっており、この理由が「カリキュラム上の問題」と密接に関連していると考えられる。

APUのカリキュラムでは、言語基準が異なる学生がともに学ぶ機会が限定されている。国内学生の「反対の言語基準学生と共に学ぶ機会が少ない」と回答している比率の高さにも示されているように、国内学生は国際学生と共に学ぶことに対する高い期待感を持って入学してくる。しかしながら、カリキュラムの構造上、国内学生が国際学生と学ぶ機会が限定されてしまうため、大学生活に対する意欲が低下している可能性が存在する。

異なる言語基準の初年次生同士が同じ教室で学んでいく機会を設けることは、現在のAPUのカリキュラム構造上困難であるが、反対言語基準の初年次生同士が共に学ぶ環境を従来以上に増やすことにより、国内学生の大学生活に対する意欲の向上が期待される。

2. キャリア・アドバイザー（将来に対する目標設定の支援）

アンケート結果を通して、APUにおいても国内・国際学生ともに大学生活に対する動機付けが希薄な学生が存在することが明らかとなった。このような学生は、自身の将来に対する目標が見出せないために、将来を見据えて大学生活を送ることができていないと考えられる。初年次生が将来への目標を設定するための支援することにより、初年次生は自身の大学生活に対して真剣に向き合うことが可能となり、大学生活に対する意欲を高めることができると考えられる。特に国内学生については、「大学で学習する目的が見つからない」と回答している学生の比率が高くなっているため、将来に対する目標設定を支援し、大学生活に対する意欲を高める支援を行っていく必要があると考えられる。

また、授業への出席など大学生としての自己管理ができない学生についても、将来に対する目標設定を行い、大学生活に対する意欲を高めた上で、適切なタイムマネ

ジメントの方法を身に付けることによって自己管理を行うことが可能となることが期待される。

3. 反対言語能力の強化

国内・国際学生ともに反対言語の能力不足を強く感じており、特に国内学生については、国際学生と比較し、学力が不十分であると感じている学生の比率が高くなっている。

言語能力の向上のためには、その言語の基礎力を修得することも重要であるが、日常的にその言語を使用し、実際に“使える”喜びを感じることによって、その言語習得に対する意欲を向上させていくことが重要であると考えられる。また、前述したように、APUは言語基準によりクラスが分かれているため、英語をより実践的に使う機会が限られている。これまで以上に初年次の段階で反対言語基準の学生同士が共に学ぶ環境を構築し、二回生以降もその関係を維持しつつ、反対言語の修得に対する意欲を継続させていく仕組みづくりが必要であると考えられる。また、多くの国際学生にとっては入学言語基準についても母国語ではないため、入学言語基準の能力についても不足であると感じているようであり、国際学生の入学基準言語の支援についても必要であることが伺われる。

4. スタディスキルとスチューデントスキルの修得

国内・国際学生ともに、大学での勉強の仕方（ノートの取り方・レポートの書き方）やプレゼンテーション能力といった大学生として必要な学習スキルであるスタディスキルが不足していると感じている。これらの基礎的な学習スキルについては、現在新入生WSIの学習内容に含まれているが、さらに強化していく必要がある。

また、大学生活では、高校までと異なり初年次生自身が一日の大半のスケジュール管理を行っていく必要があるが、初年次生は授業への出席など自己管理が行えておらず、学習とその他の活動とのバランスを取ることにについても苦勞しており、初年次生にとってタイムマネジメント能力等のスチューデントスキルの修得は大学生活に移行する上で非常に重要であると考えられる。

5. 担当教員制による小規模集団でのきめ細かな指導

学生アンケート回答者の約半数が初年次段階における小規模集団による学習の重要性を感じており、小規模集団を通して初年次生が教員との関係構築を行った上で、学習面におけるより細やかな支援を受ける必要があると考えられる。前述したように特に国際学生については、学習面における相談相手が不足しており、小規模集団による担当教員制等の必要性がうかがわれる。

VII. 教員アンケート調査にみる意識実態

1. 教員アンケート概要

- ①アンケート名：「APU初年次生と初年次教育」に関する教員アンケート
- ②実施目的：APU学生の大学生活に対する意欲、学力、APU初年次教育科目に対する理解度などの把握
- ③実施日時：2008年7月末～2008年10月末
- ④対象人数：APU専任教員 138名（言語担当教員は除く）
- ⑤回収数（回収率）：47枚（34.1%）

2. アンケート結果の分析

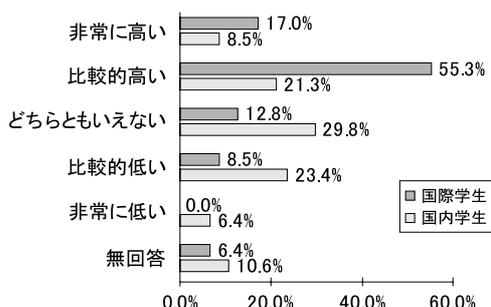


図10 教員が感じるAPU生の大学生活に対する意欲 (n = 47)

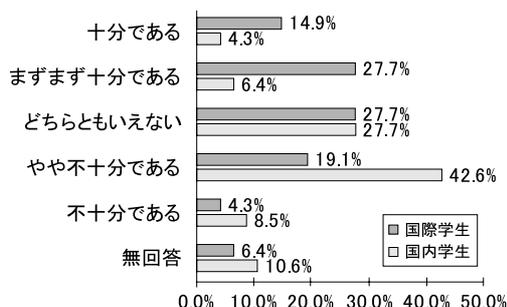


図11 教員の感じるAPU生の大学生としての学力 (n = 47)

（1）APU学生の学習に対する意欲および学力について

国際学生の学習に対する意欲について、「非常に高い」もしくは「比較的高い」と回答した教員は72.3%であった（図10）。一方、国内学生の学習に対する意欲については、「非常に高い」もしくは「比較的高い」と回答した教員は29.8%であった。

学力については、国際学生の学力が「十分である」もしくは「まずまず十分である」と回答した教員は42.6%であった（図11）。国内学生については、学力が「十分である」もしくは「まずまず十分である」と回答した教員は10.6%であり、「やや不十分である」もしくは「不十分である」と回答した教員は51.1%にも上った。

実際に不足している能力については、国内学生の「入学基準言語の文章作成力（22.2%）」、が特に高くなっており、また国際学生については「入学基準言語のコミュニケーション力（12.1%）」、「問題解決力（9.1%）」となっている。共通して不足している能力については「論理的思考力（国内18.1%、国際15.2%）」、「レポートの書き方（国内9.7%、国際12.1%）」、「入学基準言語の読解力（国内9.7%、国際12.1%）」となっている（図12）。

（2）現在の初年次教育科目について

現在APUにおいて初年次生が履修する新入生WSI・IIについて、その内容を「良く知っている」もしくは「ある程度知っている」と回答した教員はWSIが57.4%、

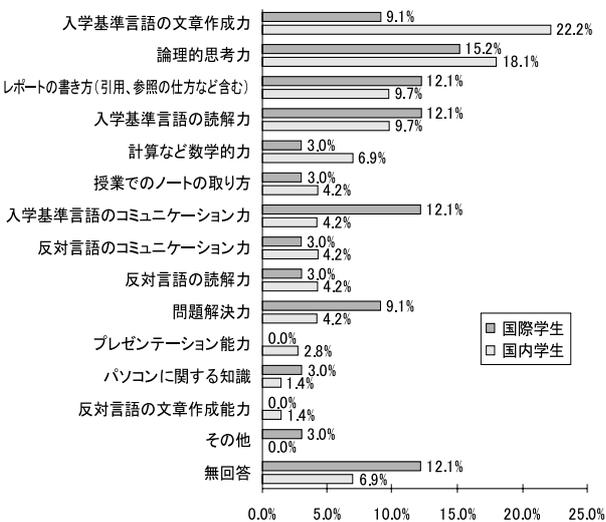


図12 教員が感じるAPU生に不足している力 (n=47)

WSIIが40.4%であった（図13）。また、それらの学習内容については、「やや不十分である」もしくは「不十分である」と回答した教員は、WSI 34.6%、WSII 26.3%であった（図14）。

また、「本学において初年次生の学習支援を目的とした小規模集団による新たな初年次科目が設置された場合、この科目を担当することに対してどの程度関心がありますか」という質問に対しては、「非常に関心がある」もしくは「ある程度関心がある」と回答した教員は51.1%であった（図15）。

VIII. 教員対象アンケート調査のまとめ

1. 入学時の学習意欲は高いが学力は不十分

教員は、一部の国内学生の学習に対する意欲は高いと感じており、国際学生の大部分の学習意欲についても高

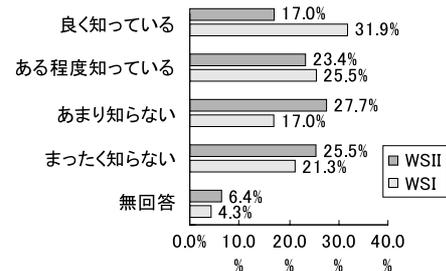


図13 教員の新入生ESI・IIに対する認知度 (n=47)

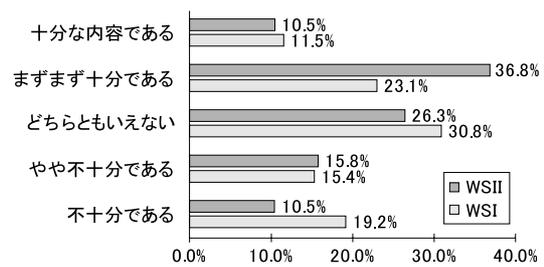


図14 教員の新入生WSI・IIの学習内容に対する感想 (n=47)

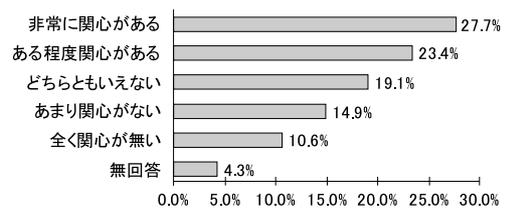


図15 小規模集団による初年次科目を担当することに対する教員の関心度 (n=47)

いと感じている。しかし、一方、教員は国内学生の大学生としての学力が特に不十分であると感じており、国内学生の学習に対する意欲を向上させ、学力を向上させる取り組みの必要性が伺える。

2. 50%以上の教員が初年次教育科目に関心がある

現在のAPUにおける初年次教育科目である新入生WSIおよびIIの学習内容に対する教員の認知度は、決して高いものとはいえない。その理由は、これらの科目を担当する教員はごく一部の教員であり、その学習内容や初年次生の抱える問題点などについて議論する場が不足しているからであると考えられ、多くの教員間でAPU学生の現状についての認識を深め、APUの初年次教育について議論を行う機会が必要である。

しかし、一方で小規模集団による初年次教育科目を担当することに対しては、半数以上の教員が関心を持っており、APUにおいて小規模集団による初年次教育科目を設置した場合には、教員の積極的な参画が期待できると考えられる。

また、大学生として必要な学習スキルの修得などに重点を置いている新入生WSIの学習内容について、3割以上の教員が不十分であると感じており、特に以下の項目について強化していく必要があると考えている。

- ①国内・国際学生共通に論理的思考力、レポートの書き方、入学基準言語の読解力
- ②国内学生に入学基準言語の文章作成力
- ③国際学生に入学基準言語のコミュニケーション力、問題解決力

Ⅷ. 政策提起にあたって

海外大学調査、学生アンケート調査、教員アンケート調査の結果を踏まえ、APU初年次生に対して必要となる支援内容を整理すると、①初年次生がカリキュラムに対する理解を深め、2年生以降も系統的に学習を進めるためのアカデミック・アドバイジングの導入、②反対言語の習得に対して意欲を高めさせるため、初年次段階から国内学生と国際学生が共に学び、関係構築を行う仕組みづくり、③大学生として必要となるスチューデントスキルを獲得させる仕組みづくり、④初年次段階から将来に対する目標を設定し、将来の目標を見据えて大学生活を送るためのキャリア・アドバイジング、⑤入学基準言

語および反対言語能力の向上となる。これらを正規科目WSIと寮を基盤としたラーニングコミュニティの構築によってすすめる。リビング・ラーニングコミュニティの構築に当たっては、既存のWSIの改訂とリビング・ラーニングコミュニティの有機的な融合をはかる。WSIの改訂をはかる理由は、①当該科目が全初年次生を対象に開講されている正規科目であること、②専任教員を貼りつけていること、③教員アンケートからも、内容が不十分であると指摘されていること、④新たな科目を起す必要がないこと、⑤両言語基準の初年次生が同じコンテンツを学ぶため、反対言語基準の学生同士で共同学習などが行いやすいことである。

Ⅹ. 政策提起

1. 正規科目 (WSI) とリビング・ラーニングコミュニティの有機的な融合

全初年次生が履修する新入生WSIとAPハウスの環境を有機的に融合させることにより、APU初年次生が大学において成功を修めるための支援を行う。

具体的には、現行の新入生WSIに以下のような変更を行っていく。

(1) 小規模集団による担当教員制とアカデミック・アドバイジングの導入

現在、教員一名が平均75名の初年次生を担当している新入生WSIを、教員一名あたり20名程度の担当とし、初年次生との緊密な関係構築を行い、初年次生が教員に相談しやすい環境やより細やかな学習支援を行える環境を整える。さらに、教員によるアカデミック・アドバイジングを実施し、2年生以降も系統的に学習を行っていくための支援を行っていく(毎授業終了後2名程度ずつ実施)。

(2) WSIにおいて重点的に取り組む内容

①大学生として必要となるスタディスキルとスチューデントスキルの強化

大学のリソースの紹介、レポートの書き方、ノートの取り方、プレゼンテーション手法のスタディスキルとタイムマネジメント力の向上や大学生として必要となるスチューデントスキルの修得に重点を置き、これらを目的とした内容を強化していく。

②入学基準言語能力の向上

新入生WSIではAPU学生の入学言語基準の文章作成能力、読解力、コミュニケーション能力の向上に重点を置いた講義や課題を行う。具体的には課題図書を設定し、レポート課題、ディベートなどを複数回実施する。また、初年次生の問題解決能力や論理的思考力の醸成を視野に入れた課題図書、授業において取り上げるトピックや課題を選定する。

③キャリアセッションの実施

初年次生の将来に対する目標設定支援を目的としたキャリア・オフィスによるキャリアセッションを実施する。具体的には、就職活動に重点を置いた入学から卒業までの流れ、上回生による就職活動体験談、自己分析などを実施し、初年次生が将来に対する具体的なイメージを持ち、大学生活を設計できるよう支援する。

(3) 新入生WSIにおける課題やトピックの設定方法

初年次生が寮に帰ってから議論を行いやすいトピックや共同で行う課題を設定する。また、定期的に反対言語基準のグループ同士が協力できる課題や議論を行えるトピックを選定する。そのことにより、さらに高いレベルで反対言語を使用する機会が増え、反対言語修得への意欲を向上させることをねらう。

リビング・ラーニングコミュニティにおいて、活発な議論や共同作業などを通して初年次生同士のさらなる関係構築が進み、新入生WSIにおける議論もより活発となることで、新入生WSIを通じた初年次生の論理的思考力やコミュニケーション能力の向上をねらう。

これまでに述べたWSIの改訂点を盛り込んだシラバスを表5に示す。

2. APハウスリビング・ラーニングコミュニティの編成

APハウスのリビング・ラーニングコミュニティは、

表5 新入生WSIの改訂案

| | 現行 | 改訂案 |
|------|---|---|
| | 新入生WSIの概要 | キャリアセッション |
| 第1回 | ・新入生ワークショップの紹介、新入生ワークショップについての質疑応答 | ・就職活動体験談、自己分析、共通課題①（コミュニティメンバーの夢は何？） |
| | データベース講習会 | スチューデント・スタディスキル① |
| 第2回 | ・データベースの使い方 | ・大学生としてのタイムマネジメント、ノートテイキング手法、共通課題①提出、課題図書① |
| | 図書館の利用法 | スチューデント・スタディスキル② |
| 第3回 | ・ライブラリーとは何か、ライブラリーで利用できる資料、電子媒体 | ・APUのリソース紹介、ライブラリーの利用法、グループ課題① |
| | コーネル手法によるノートの取り方 | 批判的思考と論理的思考① |
| 第4回 | ・講義でのノートのとり方約の仕方、「Cornell Method」注方によるノートのとり方 | ・課題図書①に関するディスカッション、批判的思考と論理的思考①、グループ課題①提出 |
| | 要約文の書き方 | 学術論文・書評・要約文・エッセー |
| 第5回 | ・学術論文の批評の仕方とは、書評・要約文・エッセーのかき方とは | ・学術論文の批判の仕方、書評、要約文、エッセーの書き方、課題図書②、課題図書①レポート提出 |
| | レポートの書き方①「トピックの選択」 | レポートの構成・書き方① |
| 第6回 | ・レポートの構成に必要な要素、研究プロセスの紹介・研究計画など | ・レポートの構成・書き方、WSI振り返り①、共通課題②（アジア太平洋地域の課題を知る） |
| | レポートの書き方②「テーマの設定」 | 研究の進め方 |
| 第7回 | ・情報を頭の中で整理するための方法、絵を描くことで頭を整理する方法 | ・研究を行う際のプロセス、課題図書レポート提出、グループ課題② |
| | レポートの書き方③「研究計画」 | レポート構想発表 |
| 第8回 | ・レポートの出だし、本論の構成、参考文献、引用文について | ・研究構想発表（共通課題②について）、グループ課題②に関するディスカッション、課題図書③ |
| | レポートの書き方③「校正」 | レポートの構成・書き方② |
| 第9回 | ・第3者によるレポートをチェックの意義、修正、手直しなど | ・レポート作成の復習、課題図書③に関するディスカッション・WSI振り返り② |
| | プレゼンテーションとは | 批判的思考と論理的思考② |
| 第10回 | ・プレゼンテーションの重要なポイントを学ぶ | ・批判的思考と論理的思考の復習、共通課題②レポート提出、共通課題③（日本の文化） |
| | プレゼンテーション① | 情報リテラシー① |
| 第11回 | ・アイデアや文献資料を口頭発表用にアレンジする方法を学ぶ | ・情報リテラシー①、共通課題③に関するディスカッション、課題図書④ |
| | プレゼンテーション② | プレゼン構想発表 |
| 第12回 | ・プレゼンテーション実施に向けてのアドバイス | ・共通課題③レポート提出・プレゼンテーション内容発表 |
| | プレゼンテーション③ | 情報リテラシー② |
| 第13回 | ・プレゼンテーション予選 | ・情報リテラシー②、プレゼンテーション手法、課題図書④に関するディスカッション |
| | プレゼンテーション④ | プレゼンテーション準備 |
| 第14回 | ・プレゼンテーション本選 | ・プレゼンテーション準備 |
| | 期末試験 | プレゼンテーション発表 |
| 第15回 | | ・プレゼンテーション大会、WSIの振り返りレポート |

日本語基準新生WSIの1クラスと英語基準の新生WSIの1クラスを一つのリビング・ラーニングコミュニティとして、約40名で寮生活を行っていく。シェアタイプの居室については、反対言語基準の初年次生同士が入居し、個室タイプの居室については隣の部屋を反対言語基準の学生が入居する。

このように教室内外において初年次生が多く時間を共有し、協力して課題に取り組んだり、授業内容について議論を行ったりすることによって、初年次生同士が互いに刺激し合い、強い結束力が生まれ、大学生活に対する意欲が向上することをねらう。また、反対言語基準の学生と居室をシェアする（もしくは隣に居住する）ことにより、日常的に反対言語を使用する機会が増え、反対言語の修得に対する意欲も向上し、反対言語能力が向上することをねらう。

さらにリビング・ラーニングコミュニティの効果を一層向上させるために、以下の取り組みを行う。

(1) 教員のAPハウスへの定期的な訪問

教員が自身の担当する新生WSIのリビング・ラーニングコミュニティを訪問し、初年次生と交流することにより、初年次生と教員の良好な関係を構築する。初年次

生と教員の良好な関係が構築されることにより、初年次生へのアカデミック・アドバイジングを中心とした支援内容の充実や新生WSIを通じた学力の向上を可能とする。

(2) APU英会話集中講座^{注10)}との連携

現在APUに入学する国内学生を対象として実施しているAPU英会話集中講座を受講した初年次生を、同じ新生WSIクラスに振り分け、入学前から英語能力向上を目的としたリビング・ラーニングコミュニティを構築することにより、国内学生の英語習得に対する意欲向上をねらう。

APUハウスのリビング・ラーニングコミュニティモデルを図16に示す。

XI. 研究のまとめ

本研究における学生アンケート調査を通してAPU学生の入学時の大学生活に対する意欲および入学後の変化、意欲が低下する理由、初年次生が学習面と生活面で苦労している点などが明らかとなった。また、教員アンケート調査を通して、教員が感じるAPU生の実態、初

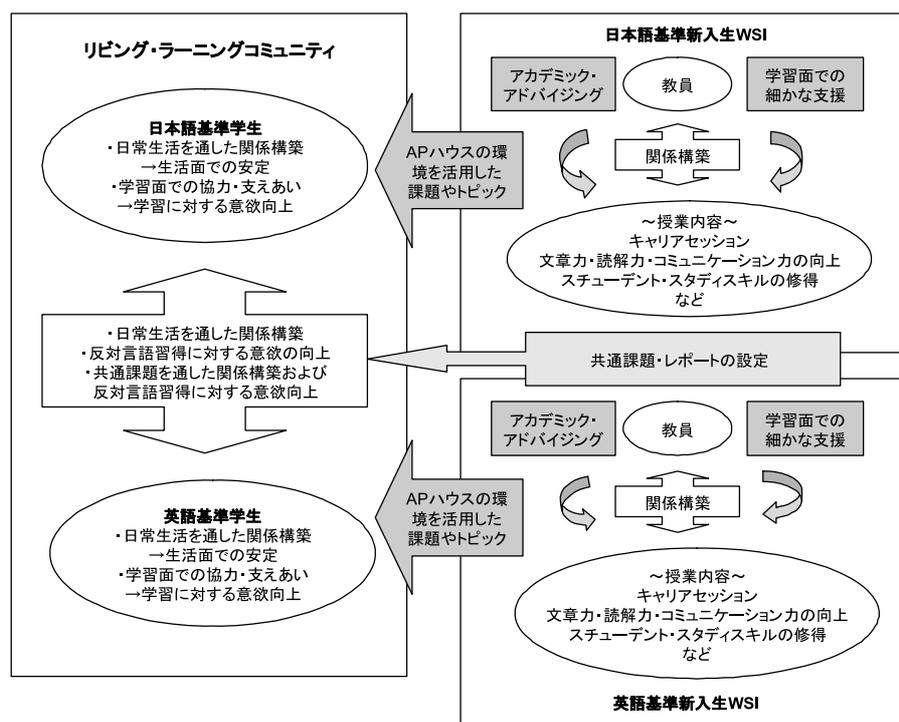


図16 APハウสลビング・ラーニングコミュニティのモデル

年次教育科目に対する認識などが明らかとなった。

これに基づき、海外におけるリビング・ラーニングコミュニティをモデルとして、初年次生を生活面および学習面において支援することを目的としたAPハウスにおけるリビング・ラーニングコミュニティの構築を提案した。初年次生同士や教員との関係構築を行い、初年次生の大学への円滑な移行が進むことにより、APUの多文化環境を十二分に活用し、その後の4年間の学修を成功に導くことが期待される。また、このような寮を基調とした取り組みは国内で前例がなく、国内他大学の先進的モデルとなることが期待される。

XII. 残された課題

本研究では、寮に入寮する初年次生の支援方法としてAPハウスにおけるリビング・ラーニングコミュニティの構築を提起した。国際学生については、ほぼ全員の初年次生がAPハウスへ入寮するが、国内学生については4割程度のみが入寮する。新入生のAPハウスへの全寮制を含め、APハウスに入居しない国内学生に対する支援方法については、今後検討していく必要がある。また、本研究で提案したリビング・ラーニングコミュニティを導入した際の効果の検証方法を確立し、プログラムのさらなる向上に努めていくことも必要である。

また、小規模集団による新入生WSIの担当教員制を提案したが、そのためには新入生WSIを担当する教員の大幅な増加が大きな課題である。これについては、教員数自体を大幅に増加することは困難であるが、すでにAPUでは2011年度のカリキュラム改革に向けて、教員の責任コマ数の見直しや小規模集団による担当教員制の検討も本格的に開始している。さらに2008年度教育GPとして採択された初年次教育プログラムのAPU入門や新入生WSIIとAPハウスのリビング・ラーニングコミュニティを連携させることも考えられる。

【注】

- 1) 2000年のAPU開学時に主に国際学生の受け入れのために建設された。APハウス1、2の2棟から成り、居室総数は全1310室。居室には個室タイプ（902室）とシェアタイプ（378室）がある。
- 2) 寮を基盤とした学習共同体の意。ラーニングコミュニティとは同じ集団の学生が講義を一緒に受講し、放課後など一緒に学習を行うことによって、学生の学業面における成功を

高めると同時に、共同体としての社会的統合性を養うことを目的とした仕組みである。通学学生のみを対象とするものや寮をベースとしたものなど、大学によって形態は様々である。

- 3) 1983年に中曽根内閣が提言した「留学生受入れ10万人計画」に続き、福田内閣は2007年に「留学生30万人計画」を提示し、2020年までの達成を目標としている。
- 4) Association of College & University Housing Officers-International (ACUHO-I)による学寮担当職員や教員を対象としたリビング・ラーニングプログラムに関する会議。2008年度は10月25日～27日の期間に米国ダラスで開催。
- 5) Biology Intensive Orientation for Studentの略。BIOSは、生命科学の分野において専攻を考えている入学予定者を対象とした5日間の宿泊型入学前オリエンテーションであり、大学における学習への意欲を高めるために教員による生命科学分野の講義（計9回）を中心に、自習時間や講義内容に関する試験（計3回）なども実施される。
- 6) ルイジアナ州立大学のWischusenら（2008）は、BIOS学生と通常学生の生命科学分野4科目の修得率の比較を行い、2005年度については3科目、2006年度については全ての科目においてBIOS学生の単位修得率が高く、有意差が認められたという結果であった。また、BIOS学生と通常学生の第4セメスター終了時における生命科学分野における在籍率を比較したところ、BIOS学生の在籍率の方が高いという有意差が認められたとの結果であった。
ノースカロライナ州立大学のAmbroseら（2008）は、FYI履修の有無とFYIとUCS101を同グループで履修をしたか否かによって、初年次生をグループ①（FYCV寮生、USC101とFYIを同集団で履修）、グループ②（USC101とFYIをそれぞれ別の集団で履修）およびグループ③（USC101履修、FYI未履修）に分類し、この3グループの2005年度GPA・修得単位数および3グループの2年後のGPA・修得単位数を比較した。その結果、2005年度GPA・修得単位数は上からグループ①、②、③の順位であり、グループ①と③の間には有意差が認められた。また、3グループの2年後のGPA・修得単位数についても同様の結果であった。
- 7) 初年次生教育に含まれる3つのカテゴリーにアカデミックスキル・スチューデントスキル・ソーシャルスキルの修得がいはれる。
- 8) APUでは、入学時に言語基準が定められており、国内学生の約97%が日本語基準、国際学生の約84%が英語基準となっている。
- 9) APU初年次生が履修必須となっている初年次教育科目。新入生WSIでは主に大学生としての学習スキルを中心に学び、新入生WSIIでは多文化学習の基礎を学ぶ。
- 10) 早期に入学決定した国内学生を対象とした10日間の英語集中講座。2008年は183名が参加。

【参考文献】

- 1) 濱名篤、川嶋太津夫『初年次教育（歴史・理論・実践と世界の動向）』丸善、2006年
- 2) 山田礼子『一年次（導入）教育の日米比較』東信堂、2005年
- 3) 中央教育審議会大学分科会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」、2008年3月25日
- 4) 『カレッジマネジメント』145、リクルート、2007年7月
- 5) 『Between』No.222、Benesse、2007年夏号
- 6) 中村展洋「立命館アジア太平洋大学における国際学生寮の教育的効果とレジデントアシスタント養成プログラムの開発について」『大学行政研究』1、2006年、pp.139-151
- 7) 山田礼子『初年次教育ハンドブック』丸善、2007年
- 8) Sheri M. Wischusen, BIOS Biology Boot Camp & BIOSphere: Helping First-Year Students Excel in Science, 2008Living-Learning Conference 配布資料, 2008年
- 9) John Ambrose, The FYC Village: How Our Academic and Student Affairs Work Together, 2008Living-Learning Conference 配布資料, 2008年

[参考 URL]

- 1) ワシントン大学ホームページ <http://www.washington.edu/>
- 2) ルイジアナ州立大学ホームページ <http://www.lsu.edu/>
- 3) ノースカロライナ州立大学ホームページ <http://www.ncsu.e>

Creation of a living-learning community in AP House, the international dormitory of Ritsumeikan Asia-Pacific University

OSAWA, Yoshiki (Staff of Academic Office, Ritsumeikan Asia Pacific University)

CHIKAMORI, Setsuko (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

KIDA, Naruya (Deputy Director, Academic Affairs, Ritsumeikan Asia Pacific University)

ABE, Yasuharu (Administrative Manager, Academic Office, Ritsumeikan Asia Pacific University)

Keywords

Living-learning, learning community, residence, First-year experience, transition stage education

Summary

In recent years, concerns have been raised that the popularization of higher education in Japan is resulting in declining academic standards among new students and the dilution of their sense of purpose, and there is a strong need for universities to engage in efforts to support students' transition to life at university. At Ritsumeikan Asia Pacific University (APU), which has many international students, assistance to international students in making a smooth transition to life at a Japanese university, in terms not only of daily life but also of study, is increasingly required.

In this research, we use a questionnaire survey of students and faculty to elucidate the content of support for daily life and studies and students' actual situations at the first-year stage, which is extremely important for both Japanese and international students to achieve "success" at APU. Taking as our model the "living-learning community" based on the dormitory, which was developed in the United States as an effective means of supporting the transition to university life for first-year students, we are creating a living-learning community in AP House, the international dormitory in which many of APU's first-year students live.